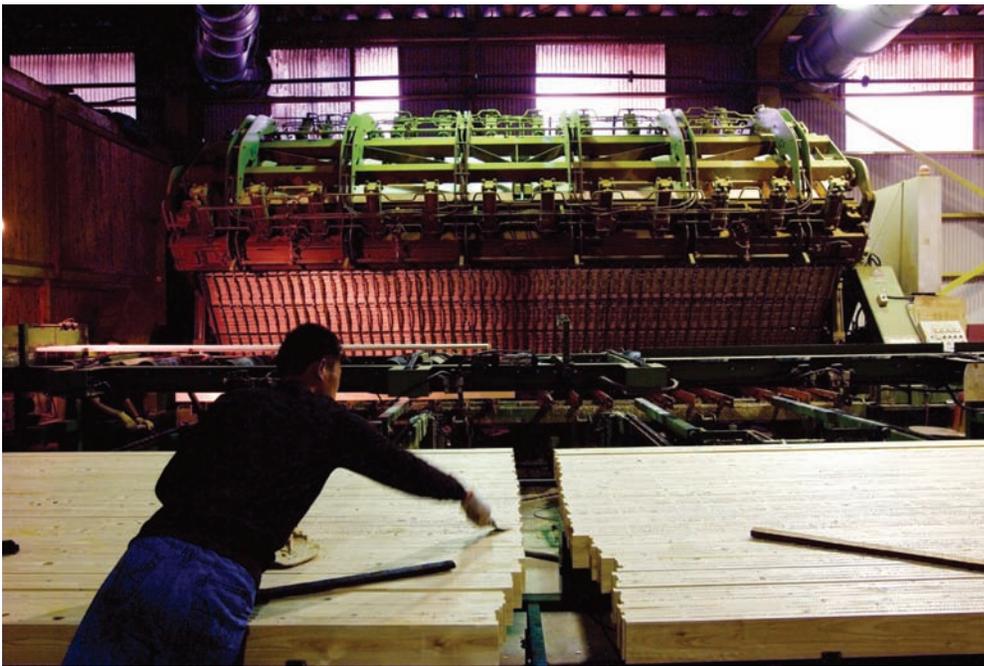


合板国産材化で 主要構造材の 七〇%を国産材に

現在、同社が使用する主要構造材の国産材比率は五一%となっている。



土台や柱に使うヒノキ集成材「スーパー檜」には間伐材や小径材を利用している

具体的な数値でいうと、同社が一年間に使用する主要構造材の材積（使用実材積）は約一五万 m^3 （一棟が平均四五坪で一五 m^3 。その一万棟分）で、そのほぼ半数となると国産材の使用量は七万五〇〇〇 m^3 程度となる。

を實現させるため、同社が次に取り組むことにしているのが合板の完全国産材化である。

現在、主要構造材のひとつである剛床用の床合板（二四mm厚）に

ついては、ロシアカラマツ（ラーチ）と

スギ単板を交互に接着した複合合板を使用している。しかし、ラー

チについては来年から八〇%という高率輸出

税が課せられるという事情もあり、今年一〇

月から表層の単板を、東日本では国産カラマ

ツに、西日本ではヒノキにそれぞれ切り替えることを決定した。さらに構造材料

ではないが、屋根の野地板に使用する合板（一二mm厚）についても、同

様の仕様に切り替えることにした。

これらの決定については、住まいを提供する立場の責任として、国産材への仕様変更で建物の性能が低下

しないように実験データを解析して万全を期した。床合板の場合、表層

にカラマツやヒノキを使うのは強度を確保するためで、それに加えて、梁の間に受け材を入れて支えを増やすことにより、平面剛性が十分発揮

できるようにした。野地板で表層にカラマツやヒノキを使うのは釘保持力を高めるためで、それで耐風性能が十分確保できることを確かめた上で採用に踏み切った。



今年10月には床合板をオール国産材化し、主要構造材の国産材比率を70%引き上げる

国産材の利用拡大が 全社的な重要テーマに

主要構造材の国産材比率が七〇%となれば、この部分での国産材消費量は実材積で一〇万㎡を優に超えることになる。構造材以外にも、いま紹介した野地板のほかに間柱やタルキといった羽柄材でも国産材の利用を増やしている。間柱にはスギのフィンガージョイント材を採用、タ

ルキにはこれまでラジアータパイルのLVLを使っていたが、一部を国産アカマツのLVLに切り替えた。ちなみにタルキに強度が高いLVLを採用しているのは、軒の出を深くできるようにするためである。

このように同社が国産材の利用を積極的に進めているのは、冒頭で言及したように森林整備への貢献が目的だが、さらに一歩進んだ取組として、森林認証材の活用でも実績を積み始めている。



4万haという広大な社有林のすべてでSGECの森林認証を取得している

森林認証については、平成一八年九月二五日付で四万haに及ぶ社有林のすべてでSGEC『緑の循環』認証会議の認証を取得しているが、それだけでなく、自社と関連企業とで加工流通認証（分別表示システム認定）も取得

し、SGECマークを表示した木材を使って住宅を建築できる体制を整備した。すでに北海道で供給している住宅のカラマツ集成柱は、SGEC認証材を標準仕様としている。

また、同社の場合、木材建材の最大手商社であるという顔も併せ持つが、その商材部門でも含水率一五%以下の人工乾燥材「ミズダス」をはじめとした国産材取扱量を増やしている。このほかにもグループの住友林業クレストの合板工場（徳島県小松島市）では、上述した合板国産材

化の取り組みと関連して、国産材合板の生産体制を強化しており、住友林業フォレストサービスの流通部門でも国産材の原木や製品の取扱量を急速に拡大している。

いま同社では社内さらにはグループ内のほぼすべての部門で国産材が重要アイテムとして扱われている。国産材利用のトップランナーとして、今後も同社の動きからは目が離せない。



柱や土台で国産材が標準仕様になっている「マイフォレスト」